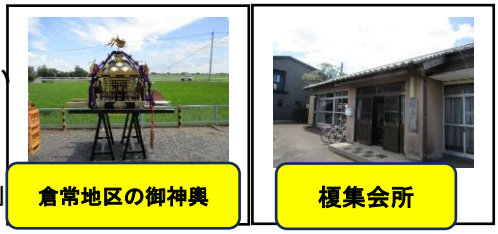
2025－ 9－ 1

36【街の散策からの気づき発見】
倉常の神楽囃子と榎の囃子神楽

会員 K.T.



7月20日（日）春日部市の指定文化財になっている富多・倉常地区に伝わる榎の囃子神楽と倉常の神楽囃子を見に行った。

伝承によれば、この2つの神楽は正徳年間(1711～1716) 頃、疫病が流行したとき、現・茨城県稲敷市の大杉神社から勧進し、疫病退散と五穀豊穣を願い囃子を演奏したのが始まりといわれる。倉常神社に11時頃着くと、神楽奉納は解散したところだった。「暑いからね、お昼前に終わります。」、とのこと。境内看板に、「倉常には囃子と神楽が伝承されています。（中略）囃子は江戸の祭囃子の流れをくみ、楽器には大太鼓、小太鼓、笛、鉦を用います。演目には、「屋台囃子」、「昇殿」、「鎌倉」、「神田丸」、「四丁目」、「カワチガイ」があります。神楽の演目には、「三番叟」、「天狐」、「天女（岩戸神楽）」、「大黒舞」、「ひょっとこ」、「獅子舞」などがあります。（後略） 令和7年7月 春日部市教育委員会」とある。倉常の神楽は終わっていたので、榎の神楽を見にいった。

幸いにも、榎の神楽は見ることができた。集会所前の看板に、「榎には囃子と神楽が伝承されています。（中略）囃子は江戸の祭囃子の流れをくみ、演目には「アゲ」、「ハヤシ」、「ショウデン」、「カンガマル」、「カワチガエ」、「ニンバ」などがあります。神楽の演目には、「寿三番叟」、「狐の種蒔」、「テンタン」、「大黒舞」、「獅子舞」などがあります。（後略）令和6年3月春日部市教育委員会 」とあった。春日部市に伝承されている神楽は富多・倉常地域に伝承される2つの他、幸松地区の東不動院野地域に伝わる「不動院野の神楽」がある。これらの3つの神楽は、いずれも大杉神社から伝えられたものだという。大杉神社は、現・茨城県稲敷市阿波（あば）にある神社である。何年か前に、参拝したことがある。この神社は「あんばさま」として、航海の安全と疱瘡除けの神様として知られている。主祭神は倭大物主櫛甕玉命（やまとおおものぬしくしみかたまのみこと）、大国主命、大黒様もこの神様の別名である。利根川の水運が発展するに伴い、船頭や水運関係者を介して、「あんばさま」の愛称で親しまれ、大杉神社の信仰が広がっていった、といわれる。社殿は茨城県の現存する木造建設の中で一番大きいらしい。社殿周りの彫刻、拝殿天井の龍の墨絵、社殿前の一対の灯篭は葵の御紋があり、徳川四代将軍家綱の寄進という。阿波の大杉神社は、豪華な社殿を擁することから、「茨城の日光東照宮」の異名をもっている。

稲敷市立民俗資料館 発行『稲敷ふるさと探究』平成28年3月から創建を引用すると、「（前略）大杉神社は、勝道上人によって神護景雲元年(767)に創建、（中略）文化13年(1816)に復元された。（中略）延暦15年(797)に快賢阿闍梨によって境内に安隠寺が開基されました。それ以来、明治初年の神仏分離までの間、神仏習合の社寺でした。（後略）」、とある。勝道上人(735～817)は、日光山の開祖といわれる山岳修行者の伝説的な人だ。諸説あるも、利根川が取り持つ縁で、春日部市には、榎・倉常・不動院野の3つの地域に神楽と囃子が郷土芸能として、今日まで伝承されている。しかし、近年地域社会が大きく変化している中で、『これからも神楽は伝承を続けていけるのだろうか』、と思う。「郷土芸能の伝承を持続可能にしていくには、何が重要か。」、その参考になる事例が、お隣の久喜市鷲宮神社に古くから伝承されている「鷲宮催馬楽神楽」にある。そこでの学校・官・民が連携して、地域ぐるみで次世代を担う神楽伝承者を育成する取り組みは、郷土芸能伝承の参考になりうると思う。紙面の関係から詳しくは、拙著『鷲宮催馬楽神楽にみる持続可能な郷土芸能伝承のあり方』https://g.kyoto.art.ac.jp>report（芸術教養学科 WEB 卒業研究展）を参照いただきたい。